NPO法人 長崎史談会

# 長崎学レポート

第17号
2025年1月1日発行
長崎学レポート
編集委員会
〒850-0861
長崎市江戸町5-8
第5一ノ瀬中央橋ビル

2024年度　第3回公開講座 2024年7月20日

## 第三回長崎学公開講座 第一部発表要旨

### 出島動物ワールド

山口美由紀

江戸時代を通じ、出島には多くの人、物、事、情報がもたらされた。なかでも人々の関心が高く、話題になったものとして、舶来の動物たちが挙げられる。海を渡ってきた動物たちは、驚きをもって迎えられたが、その舶来の経緯は様々であった。

**一、舶来動物の記録**

舶来動物の渡来年、動物種、数、持渡船、譲渡先等の詳細がわかる資料として、『明治前動物渡来年表』が挙げられる。本年表には、古くは中国との交流において舶来した動物たち、南蛮貿易時代にもたらされた大型獣、江戸時代に唐船、阿蘭陀船が舶載した動物たちがまとめられている。

江戸時代に長崎に舶来した動物たちの姿が描かれた、現存する絵図として、『唐蘭船持渡鳥獣之図』（慶応義塾図書館所蔵）が挙げられる。本絵図は、江戸時代に長崎代官で、御用物役を務めた代々の高木作右衛門が作らせたものである。高木家は、長崎に渡来した外国の産物を幕府に伝える役目を命じられ、描いた鳥獣の絵の一枚を控えとして保存、そのうち寛保年間（一七四一～四三）から嘉永年間（一八四八～五三）までの分が六巻の巻物として同家に残された。明治二〇年（一八八七）に折帖に改装され、高木家から松永安左衛門の手に渡り、昭和三二年（一九五七）に慶応義塾図書館に寄贈された。

絵図は「鳥之図」、「獣類之図」、「馬之図」、「犬之図」に分かれ総計二二五図。来航年、持渡船、蘭語の名前、雌雄、年齢、出身国、大きさや各部の寸法が記され、頭から尻尾まで、さらにはヒゲの有無まで詳細に描かれている。彩色があり、保存状態は良好で、動物学的に正確な写生で、たいへん貴重な史料である。

**二、献上と見世物**

舶来した動物の中でも、ゾウやラクダ等の大型獣は、当初は将軍への献上品としてもたらされた。

大型の動物は飼育が大変なため、結果としてほとんどの珍獣たちが、見世物小屋へ引き取られている例が多い。馬や犬も、将軍家が所望することが多く、体躯が大きいペルシャ馬やアラビア馬や、猟犬などの大型の犬種が献上品として好まれた。

オランダ商館長は、江戸参府に赴く際に、たくさんの献上品を持参するのが習わしとなっていて、その中には生きた動物や剥製が含まれていた。外来種の牛、馬、犬などのほか、ヒクイドリやインコなども献上された。

舶来した動物たちが御用無しとなった場合、その引き取り先となるのが、見世物小屋とその興行主であった。

江戸では、浅草や両国に、様々なジャンルの見世物小屋がつくられた。

「浅草奥山ニ於て興行」
国立国会図書館デジタルコレクション蔵

この会は個人会員と法人会員の皆様により運営されています

森谷商会
小野原本店
浜屋
メモリード
十八親和銀行
長崎バス
文明堂総本店
みろくや
福砂屋
松翁軒

大きな作り物や芝居、曲芸など、大掛かりな興行は大人気であったが、その中の一つに珍獣の見世物があった。ここには、今でいうチラシやブロマイドのような引札を製作、販売する係もいて、見世物を引き立てた。

見世物興行は、日本各地で行われ、たいへんな人気を博した動物も知られている。文政四年(一八二一)に渡来した雌雄のラクダは、日本各地を巡行し、大きな話題となった。文政六年(一八二三)大坂、京都に始まり、文政七年に江戸、文政九年に名古屋へ。版画や引札等から、その熱狂ぶりがうかがえるが、見物すると病気が治る、ご利益がある、という伝聞が広まった。

寛政元年(一七八九)に長崎に渡来したヒクイドリは、銀二〇匁(約二両)で販売され、翌二年に大坂で、三年に江戸で駝鳥として興行された。

当時の引札には、この鳥の羽が「疱瘡麻疹疫疹のまじない」になるとされ、ヒクイドリを見て、羽にふれると悪病除けになると信じられていた。疱瘡(天然痘)は、治療が難しい伝染病であった。単に珍しい動物を鑑賞するだけでなく、新たな価値が付加され、人気の見世物とされたことが分かる。

身分の高い武士や豪商たちが取引によって入手した動物には、鳥が多かったことが知られている。オウムやインコは日本でも人気が高く、とくに赤、青、黄、緑とカラフルな鳥たちがオランダ船、中国船でもたらされた。

## 三、蘭館図の動物たち

オランダ商館の内部が描かれた『蘭館絵巻』には、建物や人々とともに、ウシ、ブタ、イヌ、ヤギ、カモ、ニワトリ等、多くの動物が描かれている。

出島では、東側に庭園や菜園が作られ、その片隅に、牛小屋や豚小屋があり、たくさんの動物たちが飼育されていた。

これらのほとんどは食用で、実際に食べられて廃棄された動物の骨が、発掘調査で出土している。

出土数が多い種類は、ウシ、ブタ、シカ、カモ、ニワトリである。このほか、イヌやネコなど、商館にて愛玩動物として飼育されていた動物の骨も見つかっている。

江戸時代の出島において、人と動物のつながりは深く、様々なエピソードが伝えられる。動物たちの渡来の背景や経緯を知ることによって、より深く命について考えることができる。

参考文献
磯野直秀・内田康夫『舶来鳥獣図誌』八坂書房一九九二　磯野直秀『明治前動物渡来年表』慶応義塾大学学術情報リポジトリ二〇〇七　山口美由紀『出島動物図鑑』長崎文献社二〇二三

長崎阿蘭陀出島之図『漢洋長崎居留図巻』
長崎歴史文化博物館蔵

# 第三回長崎学公開講座 第二部発表要旨

## 出島舶来染織

和田　奈緒

舶来染織品とは、外国から船で日本に運ばれた染め物や織物の総称である。江戸時代以前は中国やポルトガル・スペインなどから輸入されたが、江戸時代の出島にはオランダを通して世界各国の染織品が輸入された。

出島を拠点に国内に流通した舶来の染織品は、衣服や小物に仕立てられただけでなく、端切れまでもが収集の対象となり、様々な形で愛好され、さらに日本各地で模倣品が作られるようになった。

### 一、出島での取引

オランダ船の輸入品は、各種の手続きを経た後、長崎の地役人である目利によって鑑定・評価され、国内市場にもたらされたが、輸入反物に関しては、反物目利と呼ばれる地役人によって鑑定・評価された。

染織品は、将軍や幕府高官、長崎奉行や長崎代官、長崎地役人などから注文された品物(誂物)としても輸入され、注文の際は、数量や寸法、色、意匠などを指定したリストが作成された。

リストは通常文字のみで記されたが、中には写1(「1814年注文書」オランダ国立中央文書館所蔵NFJ1409)のように、見本の端切れが添付されることもあった。

写1

### 二、舶来染織品の種類

様々な種類の染織品が輸入されたが、その中から数例紹介する。

(一)絹織物

**海黄**(かいき)は、細い経糸と太い平糸の緯糸を用いて平織りにした薄くて丈夫な絹織物。各種色系で縦縞を織り出した「嶋海黄」、赤・黄・浅黄など各種色物の「色海黄」がある。また、「しゆりしや嶋」「しゆくたす嶋」「たあれす嶋」と呼ばれる縞模様、格子模様の織物も、海黄と同じ糸使いで作ら

れた絹織物である。

（二）毛織物

**羅紗**（らしゃ）は、保温・保湿性が高く、耐火性にも優れた毛織物で、羊毛を密に織ったものを水などに浸し、もみ縮ませた後、織の組織が分からないほど毛羽立たせて作られる。特に緋色の大羅紗は猩々緋と呼ばれた。

当時の日本にとって毛織物は貴重な輸入品として珍重されたが、オランダ側からすると、本国で生産できるものであり、温暖なインドや東南アジアなどの国々では好まれず、市場を持てなかったことから、日本貿易での取り扱いや、江戸参府での献上品にもってこいの織物であった。

（三）綿織物

**更紗**（さらさ）は、花鳥や人物、幾何学模様などを木綿布に染めた色鮮やかな綿織物で、江戸時代の中期頃まではインド産のものが輸入されたが、一九世紀に入ると、次第にヨーロッパ産のものが多く輸入されるようになった。一九世紀の日本国内ではインド更紗（写2）より、生地が密で、際立って鮮やかであったヨーロッパ更紗（写3）が高値で取引された。

写2　写3　長崎市所蔵

**奥嶋**（おくしま）・**唐桟**（とうざん）は、経糸緯糸をそれぞれ二本ずつとり、密に織りあげて作られた縞模様の綿織物である。使用される綿糸は、国産の物に比べ非常に細く、綿織物でありながら、絹織物のような繊細さや柔らかさを持っていた。

写4　唐桟（復元品）　長崎市所蔵

## 三、船来染織品を愛好

薄くて丈夫な海黄は着物や羽織、裃、袴などの裏地として、耐火性に優れた羅紗は火事装束として、それぞれの染織品が持つ特徴に応じ、様々な衣服に仕立てられた。

また、衣類以外にも、帯や鼻緒、煙草入れ、茶器の仕覆、袋物など、人々は、舶来染織品を様々な形に仕立て持ち歩いた。

小さくなった裂（きれ）も、鑑賞を目的に台紙などに貼り付け収集された。これらは「裂帖（きれちょう）」や「手鑑（てかがみ）」と呼ばれる。

また、舶来染織品を理解し、技術を取り入れようとする動きも生まれる。安永から天明年間（一七七二～一七八九）には、更紗を詳細に解説した『更紗便覧』や『更紗図譜』などの書籍が出版された。

これらには、過去に輸入された更紗の模様の紹介や、染め方などが掲載され、当時の人々の舶来染織品への関心の高さがうかがえる。

舶来染織品は、江戸時代の初め頃は高価で、富裕層が手にするものであったが、徐々に社会に浸透し、和更紗や川越唐桟など、国内で模造品が生産されるようになった。

これらの国産品の中には現在まで継承され、地域の伝統工芸品として登録されているものもある。

舶来染織品は、江戸時代の日本の人々の暮らしを華やかに彩っただけでなく、舶来染織品に用いられた染織の技術が吸収されたことで、日本の染織品をより発展させることに寄与した。

本稿は、石田千尋鶴見大学名誉教授の監修のもとに開催した企画展（「Imported Cloths ―舶来染織にあこがれて―」・令和六年八月三日～九月二十三日）の内容等を参考に新たに作成したものです。

写5　裂帖「唐倭古織裂集」（九州国立博物館所蔵）
出典：ColBase（https://colbase.nich.go.jp/）

## 特別寄稿

# 船津町の二つの川船図

原田　博二

## 一、はじめに

二〇〇一年二月、オランダに出張中の筆者は、ヒルバーサン市郊外のシープスタイン城博物館に川原慶賀の作品が所蔵されているとの情報を得、早速、調査を行った。

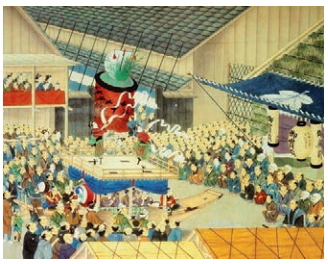
写1　シープスタイン城　博物館

同博物館（写1）は、故シープスタイン氏のコレクションを展示する個人の博物館で、慶賀の作品は一六点が確認された。

その一つが「船津町川船図」（写2・以下、「シープスタイン本」と記述）で、慶賀の最高傑作の一つと称すべきものである。

しかし、二〇一四年、再調査のため同博物館を訪れたところ、シープスタイン本は、盗難に遭ったとかで、所在不明とのこと、同本は、幻の絵画となった。

時は流れた二〇二三年一〇月、長崎を訪れていたオランダ・ライデン国立世界博物館の学芸員（博士）ダン・コック氏より最近、同世界博物館が購入した慶賀の作品の写真（写3・以下、「ライデン本」と記述）を見せられ、思わず息を呑んだ。



写2 船津町川船図
（画像データは筆者所有）

写3 船津町川船図
（画像データはダン・コック氏提供）

そこには幻のシープスタイン本と瓜二つの川船図が写っていたからである。

## 二、船津町川船図

シープスタイン本もライデン本も、タイトルや川原慶賀の款記等はないが、川原慶賀の、いわゆる慶賀工房の作品で、画面右側に諏訪神社の梶の葉の神紋を染め抜いた日覆いの幕からくんちの、それも御旅所での二人の踊子が舞台の上で布晒しを奉納する様子を描いたものである。

さらにその奥には傘鉾（写4）が見えるが、飾（だし）は、芦の間を白帆が進む芦分船、垂（幕）は猩々緋に水車と水鳥の模様であるので、この傘鉾は、船津町の傘鉾である。

写4 船津町傘鉾図（部分）

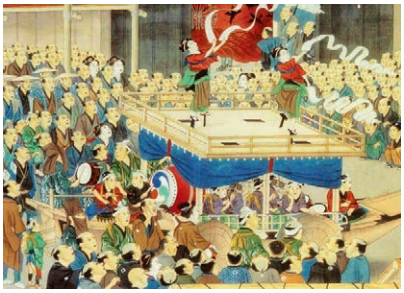
船津町は、昭和三八年（一九六三）に分割され、五島町、金屋町、恵比須町のそれぞれ一部となったが、かつては長崎の魚市場として賑わったという。

ところで画面の傘鉾であるが、傘鉾の後（うしろ）を見せて待機している。

この傘鉾が前（正面）を向けて待機していれば、日にちは一一日（あとび）であるが、後を見せて待機しているので、日にちは九日（まえび）で、布晒しは、船津町の奉納踊である。

ところでこの奉納踊は、画面左側に網打ち船頭が見えるので、川船であるが、船津町の川船は「おどり船」とも呼ばれた。

というのは、船津町には「諏訪のお庭に船ひきあげて、屋形ひらいて踊をあぐる（略）」という船唄があったように、川船の屋根を開くと舞台に早変わりした。



写5 船津町川船図（部分）

そのために屋根の内側四か所に蝶番（写5）があり、開閉できるようになっていた。しかし、シープスタイン本にはこの蝶番が描かれているが、ライデン本には描かれていない。

また「諏訪のお庭に船ひきあげて」とあるように長坂下の踊馬場での奉納の際には船を抱えあげられるよう船は軽く造られていた。

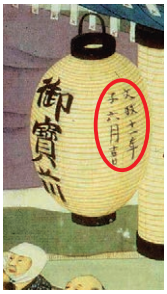
## 三、どちらが原本か

シープスタイン本とライデン本は、どちらも緻密に描かれていて、甲乙つけがたい。

特に奉納踊を見物する人たちや船津町の関係者の数は、筆者が数えたところシープスタイン本が二四四人、ライデン本が二三二人、どの顔も嬉々とした表情に溢れていて、一人として手抜きは見られない。

このようにどちらも素晴らしい作品であるが、シープスタイン本の御旅所に掛かる提灯（写6）には「文政十一年子六月吉日」と墨書されている（○印）。

この墨書からシープスタイン本が文政一一年（一八二八）の九月かそれ以後の制作と、制作年の目安になることから、このシープスタイン本は、極めて重要である。




写6 提灯

## 四、結語

船津町の川船図は、シープスタイン本とライデン本、どちらが原本かについては、シープスタイン本の提灯の「文政十一年子六月吉日」の墨書は、前述のように同本の制作年の目安となる極めて重要な情報であるが、ライデン本の慶賀？は、その重要性を認識していない。

さらには舞台の蝶番にしても舞台にするには蝶番は絶対に必要であるが、ライデン本の慶賀？は、これまた四本の黒い線の意味がわかっていないのである。

よってこれらのことは、原本あれば、絶対にあり得ないことであるので、シープスタイン本が原本もしくは原本に最も近いものと考える。